八十歳の春

西田哲郎

八十歳を眼の前にして、こゝまでの長い人生を歩いてくると、いろんなことが身のまわりに起きるし、思わぬことにぶつかりながら、一年、一年と大きくなって来た。

これが平成二十五年の新年を迎えたいま、しみじみと味わっている実感です。

それと言うのも、五年前、膵臓ガンの手術を受け、ガン再発の恐れからどうやら抜けることが出来るかと安心をしていたら、今度は家内が心臓手術を受けないと、何時心臓マヒで倒れるかもという医師の宣告を受けたのが、年末も迫った十二月の中頃でした。

早速、かかりつけの医師の紹介状をいただいて、K市内の有名な総合病院へ入院をしたのが一月十五日です。二年程前から重い物を持つことや、坂や階段を登るのが苦しくなり、最近では歩くのさえ耐えられないこともあって、そのことをかかりつけの医師に相談をしたら、その病院を紹介されたのでした。

総合病院の心臓外科の先生の執刀で、一月十七日に動脈弁と三本のバイパスをつける六時間の手術を終えたのが、夕方の四時を可成り過ぎてからでした。

そんな長い時間の手術を受けても、三日目頃にはベッドに起きあがり、病院食も喰べるし、見舞いに来てくれた二人の妹や、家の者とは良く話しをして、元気なところを見せてくれたのです。

入院をする前の歩くのさえ耐えられないような弱々しさが嘘のようで、ほんとうに手術で生き返ることができたのでした。

家内が手術を受けた翌々日、近所の六十歳前の男性が、夕方散歩に出、その途中、心臓マヒで畑の側に倒れ、翌日、明け方になって通りがかりの人に発見されたとかの話が、耳にとびこんで来ると、家内の手術をしたことが、更に嬉しくなる私です。

でも、冒頭から淋しい話でしたが、今年は正月早々、孫娘のことでとっても幸せな気持にさせてもらいました。

一年以上も交際をしていた男性から正式に結婚の申込みがあり、一月二十日の日曜日に「のし入れ」で、五月十一日に結婚式が決ったからです。孫娘も三十歳を過ぎ、そろそろ晩婚？　にと心配をしていただけに、家族皆んなで祝福をしてやることが出来、五月の結婚式ではカラオケで「祝い船」と「花笠音頭」で祝ってやろうと、今から爺やんとして楽しみにしているところです。

更に、私のことで嬉しいことと言えば、定年退職を記念して、青森、盛岡、仙台松島へ三泊四日の旅行をしたとき、松島の駅で俳句を作品投函箱（ポスト）に投函したのがその年の十句に入れていただき、更に金沢兼六園へ遊んだときに作った句が、これもこの年の十句に入れてもらえ、気を良くして再び俳句作りを始めて、長塚節文学賞に応募した作品が、長塚節文学賞を受賞することが出来ました。

それを機に本格的に俳句を始め、平成二十四年には京都で開催されたサクラ芸術展では、サクラ芸術大賞を、また、美術の森の芸術展で、その年の秀句として認定していただき、十二月にはアート・ギャラリーの一頁で全国へ紹介をしていただいたのは、今年最高の幸せです。

俳句は「心の叫び」と言うのが私の気持ですが、私の句を読んで下さった方々の心に響く句と、子供のよろこびの姿を詠んで行きたい。子供はその国の、社会の宝であり、可愛い、子供の姿を見ていると、心が癒やされます。

〝母の手に抱かれて稚児の春となる〟

〝ランドセルだけが跳ねてる新入児〟

――了――